

序論

「スピノザと私たち」、この表現には多くの意味がありうるが、なによりも「スピノザのただなかの私たち」という意味がある。(SPP 104 / 二二六)

「ドゥルーズ⇨ガタリと私たち」、この表現には多くの意味がありうるが、ドゥルーズそのひとにしたがえば、なによりも「ドゥルーズ⇨ガタリのただなかの私たち」という意味がある。ドゥルーズはなににもまして、スピノザが思考した「自然」に身を置くことを重視し、まさにスピノザの「エチカ」を生きていることを論じていたが、それにならって言えば、ドゥルーズ⇨ガタリが創造した「概念」のただなか身を置くこそが、かれらの「哲学」を読むことの意義にほかならないだろう。つまり、「差異」が蠢き「生成変化」の過程にある「ひとつの生」に身を置くことが、ドゥルーズ⇨ガタリを読むことの意義ということになるだろう。

「ドゥルーズ⇨ガタリと私たち」、この表現を手引きにして、私たちはドゥルーズ⇨ガタリを読む。すなわち、私たちは、ドゥルーズ⇨ガタリのただなか身を置くことこそが私たちにとつての問題であると考え、実際にそうすることを試みる。⁽¹⁾「ドゥルーズ⇨ガタリと私たち」、この表現にこそ、私たちがドゥルーズ⇨ガタリを読む理由と、私たちが問題がある。あるいは、この表現は、私たちがドゥルーズ⇨ガタリの著作を紐解き、その思想のただなかに入っていくための「合言葉⇨パスワード」である。

ところで、「ドゥルーズ⇨ガタリと私たち」という表現は、違和感を与えかねないものである。というのも、この

表現で用いられる「私たち」という人称代名詞は「私」と発話する主体を前提にするが、この「私」をこそ、ドゥルーズ・ガタリは批判して退けていたからである。

敷衍しておこう。そもそも「私たち」とはいかなる人称代名詞なのか。二十世紀フランスを代表する言語学者のエミール・バンヴェニストの分析にしたがえば、「私たち」という人称は「私」なくしてありえない⁽²⁾。すなわち、「私たち」は、今まさに発言していることよって定義される「私」に、「あなたたち」や「かれら／かのじよら」という「私ではないもの」が付け加わった人称として定義されるのである。「私たち」は、「私」という「主体的人称」を中心にして定義されるということである。

この言語学的な定義を踏まえれば、「ドゥルーズ・ガタリと私たち」という表現は、一見すると、ドゥルーズ・ガタリの思想と対立するように思われる。というのも、ドゥルーズ・ガタリはまさに「私」(Je)という主体を批判し、退けていたからである。かれらは主著である『千のプラトー』で、自らの問題関心を次のように述べていた。すなわち、「私とはもはや言わない地点に到達するのではなく、もはや私と言うか言わないかがまったく重要でない地点に到達することだ」(MP9 / 上一五)と。ドゥルーズ・ガタリにとって、「私」と話し、書き、思考するような主体は問題ではない。それゆえに、「私」を前提にする「私たち」という人称もまた、「私」ともども退けられることになる。このことは、ドゥルーズ・ガタリが自らの思想を「非人称的なもの」として提示していたことから理解できるだろう (cf. LS 182 / 上一六五; MP 324 / 中二一六—二一七)。たとえば、「雨が降る」(il pleut)の「il」が特定の主体を表さず、ただ生起する出来事を表現するように、ドゥルーズ・ガタリの思想は、まずもって主体なき思想なのである。こうした「非人称」は、「私」や「あなた」といった人称とは決定的に異なるものである。再びバンヴェニストを参照しよう。かれにしたがえば、 Je が表す非人称は、発言の主体とは無関係である点で「私」や「あなた」と根本的に対立する。すなわち、「人称」と呼ぶに相応しいのは、その発言の場に現前する主体の「私」(主体的人称)か、あるいは、その場に現前して呼びかけられる対象であり「私」と交替しうる「あなた」(非主体的人称)のことなのである。それゆえ、そもそも発言の場の外にいる Je は本来、文字通りの「非一人称」とみなされなければならない⁽³⁾。翻って言えば、だからこそ、非人称は、「私」や「あなた」とは異なる仕方での表現あるいは思考を可能にす

るのである。

つまるところ、ドゥルーズ・ガタリにとっては、「私」はもちろん、「あなた」も「私たち」もまた、哲学的な思考の主体にはなりえない。とすれば、「ドゥルーズ・ガタリと私たち」という表現は、かれらの思想に照らせば不適切だとみなされてもおかしくない。要するに、そもそも「私たち」は「ドゥルーズ・ガタリのただなか」に身を置くことなどできないのだと、そう思われるのである。しかしながら本当に、「私たち」と話し書き思考する主体でしかありえない私、私には、チャンスは残されていないのだろうか。ドゥルーズ・ガタリは、私、私にはなにも語ってくれていないのだろうか。「ドゥルーズ・ガタリと私たち」とは、「偽の問題」、「実在しない問題」なのだろうか（C.B.の／八）。

たしかに、「私たち」は「私」を中心に行っている。バンヴェニストの指摘を踏まえるまでもない事実である。しかしながら、バンヴェニストは同時に、「私たち」とは「私」と「かれら／かのじよら」を接合した人称である、とも指摘していた。この指摘に着目すれば、こうも考えられないだろうか。すなわち、「私たち」という一人称複数の人称代名詞が「非人称的なもの」の表現を含み込む可能性がある、と。言語学的な分析が示唆するように、あくまでも「私たち」の観点から、ドゥルーズ・ガタリを読み、その哲学のただなかに身を置くこともできるのではないか。このような試みにこそ、私、私たちにとつての、おそらくは唯一のチャンスがあるだろう。「ドゥルーズ・ガタリと私たち」、この表現にいかなる意味がありうるのか、その可能性を問うことが「私たち」以外のなものでもない私、私たちにとつての問題なのである。

1 問題設定について

私たちは以上の問題意識のもと、フランスの哲学者であるジル・ドゥルーズ（一九二五—一九九五年）の著作と、精神分析家であるフェリックス・ガタリ（一九三〇—一九九二年）との共著を讀解する。より具体的に言えば、かれらの哲学の枠組みにおいて「私たち」の主体性や経験はいかに記述されているのか、「私たち」はいかにその哲学を

生きるべきなのかという問題に取り組む。

おそらく、私たちの探究の方針には困難があるように思われることだろう。先に述べたことと重なるが、ドゥルーズ・ガタリの哲学は「差異」や流動的な「生成変化」を肯定する一方で、私たちにとっての日常的な経験には批判的だったからである。たとえば、ドゥルーズの最初の主著であり、その後のガタリとの仕事も決定的に方向づけた『差異と反復』（一九六八年）は、「差異」それ自体を思考する著作であるが、それと同時に、日常的な経験や認識をかたちづくる「表象」や「同一性」を痛烈に批判もしている。また、ドゥルーズ・ガタリの最大の共著である『千のプラトー』（一九八〇年）では、「逃走線」や「リズム」、マジヨリテイの「マイナー性への生成変化」といった独創的な概念が創造されているが、それは「マジヨリテイ性」から逃れられない私たちを「外」に開くものにほかならない。本邦のドゥルーズ・ガタリ研究への甚大な貢献で知られる宇野邦一にしたがえば、ドゥルーズ・ガタリは、「あらかじめある、とみなされ、生成や流動を閉め出し固定しようとする傾向をもつ、主体や理性や知や表象にいつも抵抗し、それらと一体の道徳、権力の〈神聖同盟〉に対抗しようとした」というわけである。

こうした理解は、ドゥルーズ・ガタリを読んだことのある多くのひとが共有するものだろう。実際、表象や同一性やマジヨリテイ性を退ける「哲学」を創造したという見方は、ドゥルーズ・ガタリの核心をたしかに捉えている。先に挙げた『差異と反復』や『千のプラトー』だけでなく、ドゥルーズ・ガタリは最後の共著である『哲学とは何か』（一九九一年）に至るまで同様の構えを崩すことがなく、「オピニオン」批判を遂行したうえで、「哲学」、「芸術」、「科学」という思考を論じていたからである。ドゥルーズ・ガタリは、表象や同一性のような、物事のあり方や認識を固定化してしまう私たちの思考の形式を批判し、多様性やマイナー性を肯定し続けた。それはつまり、私たちに「私たち」以外の存在や思考の仕方を示しつつあったということである。そこにはつねに解放への予感が満ちている。

とはいえ、ドゥルーズ・ガタリの哲学がそこに尽きるわけではない。千葉雅也が鮮やかに示してみせたように、これらは生成変化を手放しに称賛していたわけではないのだ。小倉拓也もまた指摘するように、ドゥルーズ・ガタリの哲学は決してなんでもありなのではない。ただし、こうした研究においても、ドゥルーズ・ガタリが「表象」や「同一性」、「オピニオン」などを一貫して退けたという認識は共有されているだろう。言い換えると、ドゥルーズ・ガタ

リの哲学に私、たちは何を望みうるのか、かれらの思想のただなかで私、たちは何をなしうるのか、という問いは十分に立てられていないのである。

繰り返すが、私、たちにとつての問題は、ドゥルーズ・ガタリが記述する「私、たち」にある。たとえば表象や同一性やオピニオンが批判されるべきであるとしても、だからといって、「私、たち」であらざるをえない私、たちには、それらなしに済ませることなどできない。表象も同一性もマジヨリテイ性もオピニオンも、私、たちにはいかんともしがたい経験的な事実にはかならないし、それらが批判されるからといって、それらをなくしてしまうことはできない。そうである以上、私、たちには、「私、たち」の経験を記述する表象や同一性やマジヨリテイ性やオピニオンから出発することが求められるのであり、それらを批判しつつもそれらから肯定的な意義を取り出すことが求められる。これまでにしてばドゥルーズ・ガタリの哲学は「非人間主義的なもの」として論じられてきたが、むしろ人間的なものの水準で問いを立てるべきなのだ。

2 « contre- » の思想について

もちろん、ドゥルーズ・ガタリの思想がつねに私、たち人間の経験を救うものであるわけではない。とくに『差異と反復』では、差異を肯定的な仕方でも思考することが試みられているため、表象や同一性は否定的にしか扱われていない。本書の第一章で論じるためここでは概略的に述べるにとどめるが、差異こそが一次的なものであって、表象は差異の運動を捉え損なってしまう認識形態に過ぎず、同一性はその帰結でしかない。要するに、表象はたんなる「超越論的な錯覚の場所」(DR 341/下二五五)以外のなものでもないというわけである。そのため、表象や同一性から出発することでは、どうやっても差異に届くことなどない。言い換えると、私、たちの経験などまやかしてはならないのである。

この点については、たとえば「概念の同一性」への批判をみれば分かるだろう。『差異と反復』では次のように言われている。